



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	中学生期における「暗示」の教育的効果〔論文内容及び審査の要旨〕
Author(s)	内田, 昭利
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	乙第7007号
Issue Date	2017-03-23
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/65385
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Akitoshi_Uchida_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名：内田昭利

学位論文題名

中学生期における「暗示」の教育的効果

本論文は、現職の中学校教諭が中学生を対象とし、自己効力感について10年以上にわたり実験研究、調査研究を行ってきた成果をまとめたものである。学校現場では、生徒の自己効力感を高めるために励ましをおくり、「やればできるのだ」との思いを持たせ、「できない」という思いを取り去ろうと努力する。こういった活動は「暗示」を通して行われる社会的説得として捉えることができる。著者は独創的な実験手法を用い、「他者から与えられる他者暗示」と「生徒自身による自己暗示」が自己効力感や学業成績に及ぼす影響について実証的な研究を行った。

他者暗示の研究では、プロジェクターと偏光グラスを用いた特殊な映像刺激法を用いた。この方法を用いると、複数の参加者に同じ刺激を見ていると認識させつつ、実は異なる刺激を見せることができる（縦の偏光グラスをかけた生徒は縦偏光で提示される情報を、横の偏光グラスをかけた生徒は横偏光で提示される情報を見ることになる）。この方法を用い、クラスの生徒全員に同じ課題を解いていると信じさせつつ、対象となる一部の生徒にだけ易しい課題を解かせ、好成績を取らせ、級友から社会的賞賛（他者暗示）を受けるよう操作を行った。そして、この方法より引き出される成功体験が自己効力感や、直後ならびに遅延後の学業成績に及ぼす影響につき調査した。

自己暗示の研究では、著者らが開発した「集団式潜在連想テスト」を用いた。この潜在連想テストでは、例えば「幸福」「不幸」などの単語に混ぜて「数学」「理科」という測定対象語を提示し、各単語につき「良いこと」(○)か「悪いこと」(×)を一定時間内にできるだけ速く判断させる。各測定対象語について「良いこと」と判断させる条件と「悪いこと」と判断させる条件で複数回の遂行をさせると、測定対象語の回答に要する反応時間の微細な違いが総遂行数の差として測定できる。つまり、遂行数の差分を調べることで、本人が「数学」や「理科」に対して潜在的にもっているイメージ、すなわち、本人も気づいていない教科の好き嫌いを測定することができる。この潜在的な意識を、通常の顕在的アンケートによる回答と比較し、乖離がある生徒を検出し、さらにその半数に対し、教育的介入を行った。

本稿は4部17章、4つの実験と5つの調査から成る。これらは大きく4つの内容、すなわち(1)序論、(2)他者暗示による教育的効果、(3)自己暗示による教育的効果、(4)総合考察に分けられる。以下、それぞれの内容について述べる。

1. 序論（第1章～第5章）

従来、自己効力感の最も重要な情報源は「成功体験」であると主張されてきた。しかし、「成功体験」が自己効力感を向上させるか否かは必ずしもランダム化検証実験で明らかにされてきたわけではない。こういった議論や先行研究を踏まえ、上述の刺激提示法を用いた自己効力感研究の意義について述べた。また、中学生を対象とした現場での研究が行われていないことを指摘し、実践的な学校現場において「肯定的な他者暗示」と「否定的な自己暗示」の影響を検討する必要性を指摘した。

2. 「他者暗示」による教育的効果に関する実験

研究1-3（第6-8章）では、他者暗示（社会的賞賛）の効果を検討した。その手続は、クラスの一部の生徒（対象者）に上述の特殊な映像刺激提示法を用い、難易度の低い課題を提示して好成績を取らせ、

結果として級友から社会的賞賛（他者暗示）を与える、というものである。つまり、対象となる生徒は予期せぬ成功体験により、他者暗示を受けることになる。

同じ研究手法による実験を3回繰り返して、対象となる生徒の成績（中下位のみ／中位）や、対象となる生徒の選び方（担任教諭による選出／無作為抽出）、用いられる課題（アナグラム課題／計算課題）、対象となる生徒数（24名／84名）を変化させ、異なる実験条件で成功体験と社会的賞賛（他者暗示）が自己効力感と学業成績に及ぼす影響についての実験的検証を行った。その結果、特に本研究全体の中核となる研究3（第8章）では、普段行わない課題（アナグラム課題）で予期せぬ好成績を取り、級友からの称賛を得ることが自己効力感を高めること、特に男子生徒においては学業成績の向上ももたらすことを明らかにした。

なお、統制群の生徒の成績については緩やかな低下も見られた。この低下が実験的操作によるものなのか否かを確認するため、研究4-6（第9-11章）では、成績中位の中学生の学業成績（偏差値）の変化を調査した。研究実施以前の9学年分2,038名の学業成績の提供を受け、3年間の学業成績の推移を検討するために、中学校入学後の最初のテスト（1学年1学期中間テスト）の学業成績に基づき全生徒を男女別に四分位群に分け、その後の偏差値の推移を分析した。その結果、特に女子生徒において、成績中位生の学業成績が見かけ上低下していく現象（「先頭集団効果」）が見出された。本研究における統制群生徒の成績の低下は、この「先頭集団効果」のためであることが確認された。

3. 「自己暗示」による教育的効果に関する実験

研究7-9（第12-14章）では、集団式潜在連想テストを用い、自己暗示（顕在的には「数学は嫌いだ」と回答しつつ、潜在連想テストでは「数学に対して肯定的な回答パターン」を示す反応をする「偽装数学嫌い」）の生徒を検出した（研究7）。さらに、数学嫌いの偽装と数学の成績との関連性を検討し（研究8）、自己暗示を解消するための教育的介入（研究9）について実験的な検証を行なった。

研究7では、中学1-3年生の全学年で、「数学」「理科」に対する顕在意識と潜在意識を調査し、クロス集計することで、「偽装数学嫌い／好き」「偽装理科嫌い／好き」の生徒を検出した。その結果、「偽装数学嫌い」の生徒の割合は、「偽装理科嫌い」の生徒の割合よりも有意に多く、全生徒の2割に達していることが見出された。研究8では、顕在意識／潜在意識と学業成績を比較分析した。その結果、「偽装数学嫌い」の生徒は、「好感群」（真の数学好き）や「中間群」（偽装数学嫌いとなる可能性のある予備軍）の生徒よりも成績が低いこと、しかし、「真の数学嫌い」の生徒よりは成績が高いことを示した。

上述の結果は、研究7で見出された「偽装数学嫌い」が、「真の数学嫌い」になる可能性があることを示唆している。そこで、研究9では生徒が「真の数学嫌い」とならないよう、新しい教育的介入の方法を検討した。偽装数学嫌いである生徒のうち、実験群の生徒に対しては、「あなたは心の中では数学に対して前向きに考えている」と、本人の潜在的態度（事実）を含むメッセージを伝えた。一方、統制群の生徒には、本人の潜在的態度以外は同じメッセージを伝えた。その結果、1年後まで追跡したところ、実験群では統制群に比べ、より多くの生徒に学業成績の向上が見られた。このことは、教師が生徒の「偽装数学嫌い」を発見することができれば、自己暗示による数学成績の低下を食い止めることが可能であることを示唆している。

4. 総合考察（第15章～17章）

総合考察では、本研究の結果を踏まえ、今後の課題について議論するとともに、教育現場で考えられる具体的な実践について検討した。特に、特殊な刺激提示法を用いることなく、予期せぬ成功体験をもたらすための具体的な方策、「偽装数学（算数）嫌い」の検出、集団式潜在連想テストの活用など、本研究で得られた知見を教育現場で活かしていく可能性について考察した。